

1 長期間おいしい「かぼちゃ」の栽培に向けて

[1] 収量・品質に影響を与える要因

過去5年の生育状況・収量・品質について整理した結果、露地野菜であるため気象の影響を強く受け、改めて年次変動が大きいことがわかります（表1）。

表1 かぼちゃの収量・品質に影響を与えた要因（H23～H27）

年産	収量・品質に影響を与えた要因	草勢	ほ場収量	貯蔵腐敗
H27	7月下旬からの高温・降雨（水分確保）により、生育遅れ解消。草勢維持され、8月中旬以降は冷涼で、成熟は順調。	維持	並	やや少
H26	開花始まで少雨傾向で、葉面積が不足し、着果数も不足。8月中旬以降は暑すぎず、果実の成熟は順調。	やや低下	やや低	やや少
H25	開花期まで高温・少雨傾向で、葉面積不足。果実肥大期以降は土壌水分過多で草勢低下。果実外観は良好。	低下	並～やや低	やや多
H24	葉面積が確保され、着果数・果実肥大ともに良好。たびたびの降雨により、かさぶた症状多発。	維持	高	多
H23	開花期～果実肥大期に約4週間、高温干ばつ継続。収穫期の台風により、収穫前後に腐敗果多発。	低下	低	やや多

【収量が確保された年の特徴】

- ① つる伸長期に土壌水分がある程度確保され、開花期までに葉面積が確保された。
- ② 果実肥大期に土壌水分がある程度確保され、着果負担に耐えられる状況であった。
- ③ うどんこ病防除の実施程度により差はありますが、成熟期近くまで茎葉が維持された。

【貯蔵腐敗が少ない年の特徴】

- ① 8月中～下旬が暑すぎず、降水量は平年並で、果実の成熟が順調に進んだ。
- ② 収穫～キュアリング時の天候が比較的安定しており、果実の乾燥が順調に進んだ。

[2] 今後の栽培に向けて

上記のように気象の影響は大きいですが、収量・品質を安定させるためには、作物が生育しやすい（気象変動に強い）環境を作ることが重要です。

水はけの悪いほ場は、突起果や腐敗果の発生が多い傾向です。条件の悪い年こそ、基本技術が大切です。できることから実施していきましょう！

【収穫まで草勢を維持する！】ほ場環境の整備・防除

- ① 土づくり（堆肥・緑肥・輪作）、排水対策などほ場環境の整備
- ② 貯蔵性が良く、11月以降の製品率が高い品種への移行・分散
- ③ 地力や品種に応じた適正施肥、適期作業（定植・摘心・整枝）の実施
- ④ つる直し作業と防除通路の確保、効果が安定しているスプレーヤーによる防除

【収穫時期を遵守する！】成熟日数の確保

- ① 果梗部のコルク状況、果実の成熟日数・積算温度を目安に、適期収穫
- ② 降雨後など果実がぬれている時は収穫しない

【貯蔵管理を徹底する！】納屋の環境整備

- ① 収穫後は、風乾により切り口の乾燥、品温低下に努める。
- ② 貯蔵中は、まんべんなく風が通るよう、納屋の環境を整える。

※昨年の改善資料P.24「貯蔵中の腐敗を減らすために！」も参考にしてください。

[3] 平成27年にめだった「花痕部」の障害

定植時期が早い6月1～3半旬定植の「くり将軍」・「くりゆたか」では、花痕部が大きい傾向でした。

多肥栽培、若苗定植など、初期の草勢が強くなり過ぎた場合に発生しやすくなります。本年は定植が早いほ場ほど、花芽分化時の低温・日照不足により影響を強く受け、作物体内に吸収された窒素成分が有効に活用されず、雌花が栄養過多になったためと考えられます。



図1 「くり将軍」の花痕部が大きい果実

2 キャベツ・ブロッコリー殺虫剤の適正使用について

チョウ目害虫に対し、高い防除効果をあげている「ジアミド系殺虫剤（プレバソン・フェニックスなど）」に、道内でも抵抗性遺伝子を保持したコナガが確認されました。

【コナガの防除にあたってジアミド系剤を使用する場合の留意点】

- ① ジアミド系剤の連用は避ける。
- ② ジアミド系剤による防除を実施した後、効果の確認に努める。防除効果が低いと判断された場合は、他系統薬剤による追加防除の実施を検討する。
- ③ かん注剤、茎葉散布剤としての使用時に、所定の希釈倍数を遵守する。

表2 キャベツで使用される主要殺虫剤の分類

分類	作用機構	系統	商品名
I:1	神経作用(過剰興奮)	有機リン	ダイアジノン粒剤5、オルトラン水和剤、トクチオン乳剤
		カーバメート	ランネート45DF
I:2	神経作用(過剰興奮、痙攣)	フェニルピラゾール	プリンスフロアブル
I:3	神経作用(過剰興奮、神経伝達阻害)	ピレスロイド	ペイオフME液剤、アディオオン乳剤、ゲットアウトWDG
I:4	神経作用(過剰興奮、麻痺)	ネオニコチノイド	ジュリボフロアブル(混合剤)、モスピラン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤
I:5	神経作用(過剰興奮)	スピノシン	スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC
I:6	神経・筋肉作用(麻痺)	マクロライド	アフーム乳剤
I:9	神経作用(運動制御機能低下、行動攪乱)	ピリジンカルボキサミド	ウララDF
I:11	成長調節(中腸の膜に穴を開け、敗血症を引き起す)	BT	ゼンターリ顆粒水和剤
I:13	エネルギー代謝(ATP合成阻害)	ピロール	コテツフロアブル
I:14	神経作用(神経系遮断、麻痺)	ネライストキシン	パダンSG水溶剤
I:15	成長調節(キチン生合成阻害)	IGR(脱皮阻害)	マッチ乳剤、ノーモルト乳剤
I:21	エネルギー代謝(細胞のエネルギー利用妨害)	METI	ハチハチ乳剤
I:22	神経作用(神経系遮断、麻痺)	オキサダイアジン	トルネードエースDF
I:28	神経・筋肉作用(収縮、麻痺)	ジアミド	フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、ジュリボフロアブル(混合剤)、ベリマークSC、ベネビアOD
I:UN	不明・未特定	その他	プレオフロアブル
		その他	コルト顆粒水和剤

※分類：IRAC (Insecticide Resistance Action Committee) による殺虫剤の作用機構分類

殺虫剤の効果低下を防ぐためには、異なる系統(表2)でローテーション防除を行うことが重要です。具体的な防除例については、講習会等で配布している「防除暦」を参考にしてください。